



試験の時間を学びの創造へ ～事案発生は変革の機会 ピンチをチャンスに～



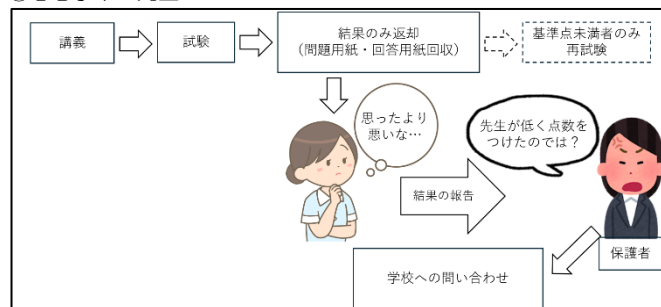
☞ カテゴリー①教育課程

☞ 学校概要 学校名：福井県立看護専門学校 所在地：福井県福井市四ツ井2丁目8-1

課程名：第一看護学科 1学年定員数：40名 修業年限：3年

☞ 取り組みの経緯

①懸念事案の発生

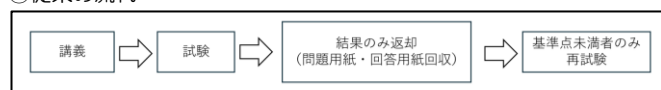


- ・当校の試験は問題用紙と回答用紙は回収し、学生の手元には残らない形式をとっていた。
- ・終講試験の際、ある学生は「よくできた」と自覚していた。
- ・試験結果が返却され自身の思ったような得点ではなかった。
(当校の試験結果の伝達方法は、学生に点数を記載した紙を渡すのみであり、回答用紙は返却しない)

・その結果を知った保護者が、
「教員が故意に特定の学生の試験結果を低く採点したのではないか」
と学校に問い合わせた。

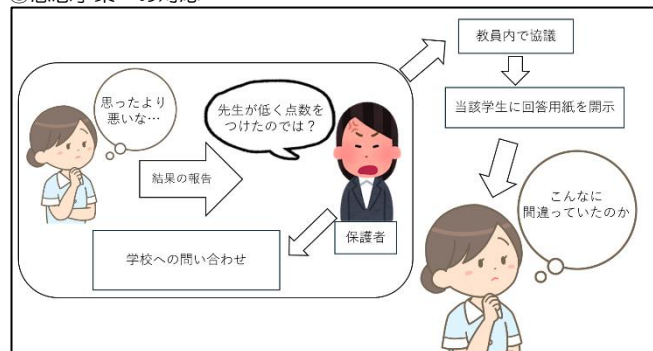


②従来の流れ

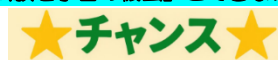


- ・試験は1コマ90分の中の50分程で行われ、
残りの時間は自由時間となっている。
- ・問題が出回った過去があり、回答用紙と問題用紙は回収。
- ・外部講師は試験時に来校はなく、専任教員が試験の配布と回収を行っていた

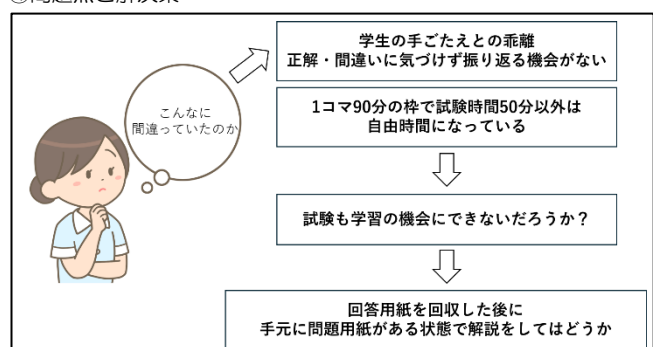
③懸念事案への対応



- ・教員内で問い合わせについて共有し、協議をしたうえで当該学生に対して回答用紙を開示することとなる。
- ・当該学生は自身の回答用紙を見ながら「こんなに間違っていたんですね」と話し、自身の「よくできた」という自覚がずれていたと認識できた。
- ・懸念事案への対応としては終了した。
→教員内で今までの終講試験の運用について疑問符が出る。
→本事案から「試験を学習の機会」とできないかと声上がる。

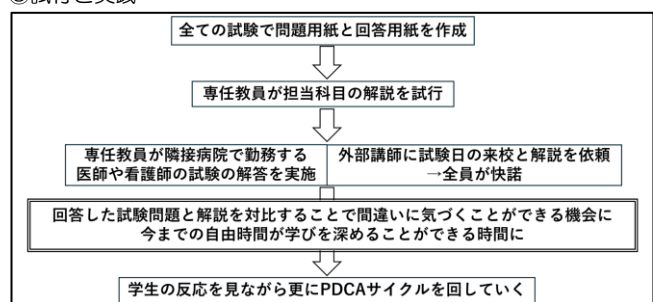


④問題点と解決策



- ・現状の終講試験運用について問題点を推考。
→学生の**手ごたえとの乖離**がある。
→試験の解答や解説は行われず、学生は**自身の回答が正答なのか誤答なのか分からない。**
→試験時間50分以外の**自由時間が有効活用できていない。**
→学生の**注目が単位を取得できたかどうか**に絞られる。
- ・解決策として「試験時間の後の自由時間に解答や解説を行う」という案が出る。

⑤試行と実践



- ・解答解説を行うために全試験で問題用紙と回答用紙を作成。
- ・先駆けて専任教員が解説を試行したところ、学生からは「**復習になった**」、「**赤点を回避できた**と分かって安心した」、「**正解が分かって、なるほどと思った**」という声が聞かれた。
- ・解説が学生にとって学びを得る機会になることが明らかになったため、解答解説の範囲を広げ、全講師に依頼すると全員から快諾を得られた。
- ・**今後は学生の反応を見ながらPDCAサイクルを回していく。**

☞ まとめ

苦情として事案を対処して終えるのではなく、学生の学びを深めるための機会、学校を変える好機として捉える。
現状の学生に合わせて従来の方法を変えるには労力がかかるが、協議を重ね、協力を得ることで解決でき、
今後もピンチをチャンスに転換していける強い組織を創る！

